



写真が人生を豊かなものにしてくれる。



11月に福岡県美術館で個展を開催される牧瀬英喜さんに取材させて頂いた。2007年から発表されている「モノクロームの巴里」の街並みや人物の情感溢れるシンボルが記憶に残っていたから「巴里」以後に発表された2012年の「ベトナムホイアン」、そして今回の「ラオス・ルアンプラバーン」と、人と街を追う撮影と個展までのお話を伺った。

写真を始めたのは、大学卒業後社会人になつた頃から。大陸動転時代によく通った京都風景にはますます面白さを感じながらも、次第に漠然と広範囲にカメラを向ける姿勢に物足りなさを感じ、気持ちが遠のいた時代が永く続いたらしい。そして50歳を目の前にした時、「撮りたいものを撮ろう」という想いが俄然強くなり、撮り切ったかのように封印していたカメラ熱が一気に再燃したという。

海外への撮影、まず香港から始めたが、写真を語る先輩の著書にある「巴里」の写真集に触発されパリを歩き回った。それからフランスの文化が色濃く残つてゐるベトナムのホイアンをTV番組で知り、ベトナム戦争のその後を見たいという気持ちもあって次の撮影がスタートした。撮影のための準備は1~2年掛けて情報を集め、アクセスや歴史、生活習慣を徹底的に調べる事、会社員だから、撮影日数は限られるが、帰づから個展に向けた作業で最終作品完成までに2年、つまり2年で費やす。パリからベトナム、「ラオスに向かったのは、東南アジアの親近感、豊かで穏やかな時間、水と緑に囲まれた優しい素朴な風景、人々の笑顔が、共に育む情景」として魅了されているという。

一度カメラから離れた時期は今の活動への助走期間、やはり写真は牧瀬さんの人生を豊かなものにしてもらっているようだ。

Profile

牧瀬英喜 Hideki Makise



1954年生まれ。福岡に拠点を置き本業の傍ら海外、地元の人の営み、街や自然の風景を撮影している。1995年、photo shopに出会い可能性を感じる。2006年からアナログからデジタルに完全移行。

2007年「巴里散策」モノクロフォト展(九州日仏学館)から、2010年まで「巴里」のモノクロフォト展や、バステルフォト展など「バ」がテーマの個展多数。2012年「ベトナムスケッチ「黄色の街」ホイアン」写真展(福岡市美術館)、2014年11月下記の写真展が開催される。

牧瀬英喜写真展

「折りと微笑みの地 ラオス・ルアンプラバーン」

●11月18日(火)~24日(月・祝)

●福岡県立美術館